

バードリサーチ ニュース

2005年11月号 Vol.2 No.11

2005-11-15
Photo by Uchida Hiroshi



活動報告

季節前線ウォッチ ～モズの高鳴き～

植田睦之

季節前線ウォッチにご協力いただきありがとうございます。最新結果はホームページ上で公開していますが、モズの結果がほぼまとまりましたので、ご報告させていただきます。

モズの高鳴き情報は、全国から50件お送りいただきました。まだまだ情報がまばらなので、はっきりしたことを言うことができないのですが、全体の傾向としては九州など南の方が早くはじまり、続いて本州の標高の高い場所、そして北海道などは遅いという傾向があるようです。北海道ではモズは夏鳥なのですが、渡りの遅い少数のモズが高鳴きしたのかもしれません。長年モズの研究を続けている大阪市立大学の高木昌興さんにお聞きしたところ、北のモズの個体群は早く渡りを開始するので、そういったものが九州など南の方に定着するために(北海道で繁殖しているモズが九州で越冬しているのが確認されているそうです)、南の方から高鳴きが早く始まるのかもしれない、ということでした。

- ～9月10日
- 9月11日～9月20日
- 9月21日～9月30日
- 10月01日～

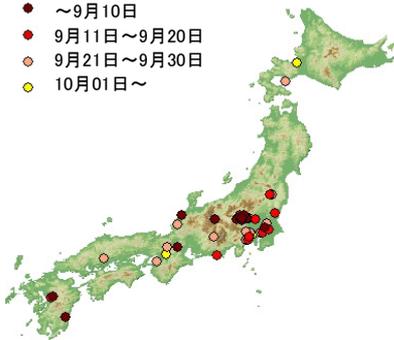


図. モズの高鳴きの記録地点の分布。

ぼくの家のみわりでは、モズは例年9月中旬には高鳴きをしていたのですが、今年は10月に入ってからでした。単に今年の高鳴きが遅かっただけかもしれませんが、家のまわりにたくさんあった畑が宅地に変ってしまったことが、モズの定着を遅らせたのかもしれません。これからたくさん情報が集まるようになったら、こういった環境による初鳴きの時期の違いなども解析したいと思っています。



写真. モズのメス。

ツグミやジョウビタキの情報もお待ちしています。今が渡来の時期だと思います。ぜひ情報をお寄せください。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_kisetsu.html

ミヤマガラス初認調査 情報が集まってきています！

高木憲太郎

ミヤマガラスの初認調査にご協力いただきありがとうございます。まだまだ情報が不足していますが、少しずつ傾向が見えてきたので、ご報告します。

福岡県の10月4日を皮切りに九州と東北の両方から時期的に早い記録が届いています(図1)。10月18日に新潟県の福島潟で、20日には早くも岐阜県で観察されました。島根県の出雲平野で観察されたのが意外に遅く21日で、その後は奈良県や栃木県でも観察記録が出てきました。特に27日から31日にかけては、全国で一斉に観察されるようになったようです。この少ない情報からでははっきりしたことはわかりませんが、渡ってくるルートはどうやら西からと、北からの最低2つには別けられそうです。また、一度に観察される群れの大きさを見てみると(図2)、最初は少数でやってきて次第に個体数が増える傾向があるようです。

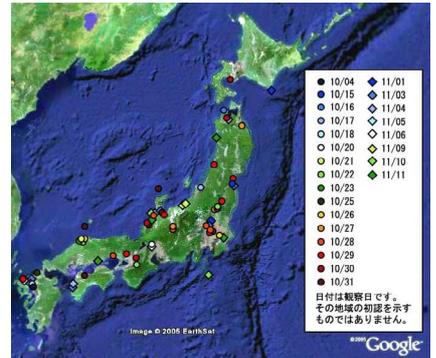


図1. 11月12日時点のミヤマガラスの観察記録の分布。

ミヤマガラスの情報は随時募集しています。下記ホームページから、お送り下さい。速報も掲載しています。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_miyamagarasu.html

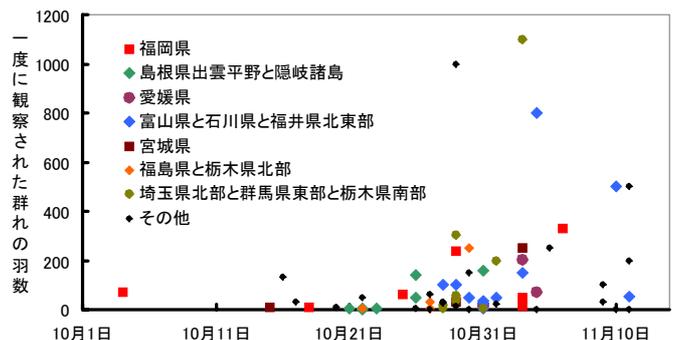


図2. 観察されたミヤマガラスの群れの大きさの変化。図1で比較的隣接している地点の情報をまとめて同じ色で示している。

活動報告

関東カワウモニタリング調査 PRO NATURA FUND の助成を獲得！

加藤ななえ

バードリサーチでは、年3回関東カワウモニタリング調査をしています。今回、新しいテーマを設けたことで、プロ・ナトゥーラ・ファンダからの助成を得ることができました。

今までに、関東地方全体の個体数が、毎年12月から3月の間に2割から3割減少することがわかっています。では、このような変化はどうして起きるのでしょうか？この時期は、東京湾沿岸の魚が深い場所に潜ってしまうなどカワウが採食できる魚の量が少なくなります。この食料不足によって、採食能力の劣る若齢個体が死んでいるのかもしれませんが、まだ確証は得られていません。また、関東カワウモニタリング調査からは、7月は東京湾沿岸のねぐらで個体数が多く、12月は沿岸のねぐらの個体数が減少し、逆に多くの内陸のねぐらで個体数が増えることがわかっています。しかし、成鳥と幼鳥を別けて見たとき、両者はこの季節的な分布の変化にどのように関わっているのでしょうか？

そこで、ねぐらでの個体数調査の際に「成鳥と幼鳥の比」を調べ、その季節変化を調べることにしました。また、東京湾の沿岸部にある3箇所のコロニーで標識調査を行ない、ねぐら調査の際にカラーリングの発見に努めることで、「幼鳥の出生コロニーからの移動」についても合わせて調べてみようと思います。助成を受けるこの1年間の調査から、今までにわかってきている関東のカワウの季節的な変化にカワウの成鳥と幼鳥がどう関わっているのかが見えてくることを期待しています。結果を楽しみにしていきましょう。

pro natura NACS-J
Foundation-Japan NATURAL CONSERVATION SOCIETY

武蔵丘陵森林公園のカワウの調査の 受託が決まりました！

高木憲太郎・加藤ななえ

カワウがコロニーを作る場所は、主に水辺の樹林などで、夜間、人が近付かないようなところ。コロニーができると、糞が葉の表面を覆うことによる光合成の阻害や糞がたくさん落ちることによる土壌の変化、カワウが巣材として枝を取るなどによって、次第に樹勢が弱まり、最終的に樹木は枯れてしまいます。水辺の樹林がたくさんあった時代は、森はカワウが他に移っている間に再生することができたので大きな問題にはなりません。今では水辺の環境の開発が進み、カワウがコロニーを作れるような水辺の樹林が減ってしまっています。そのため、公園などまとまった樹林と水辺のある場所にカワウがコロニーを作ることが増え、糞などの飛散やにおい、樹木の枯死といったことが問題とされるようになりました。そこで、この問題とうまく付き合っていくためのテクニックが必要になってきます。



写真. 森林公園のカワウ。

10月から受託することになった武蔵丘陵森林公園のカワウ調査では、公園にあるカワウのコロニーの個体数や繁殖状況の調査の他に、コロニー管理のテクニックなどの情報共有をするための検討会の運営もすることになっています。この事業を通して、コロニーの問題にも取り組んでいきたいと思っています。

海外調査情報

イギリスの2004年繁殖調査の結果

イギリスで行なわれている繁殖鳥調査(BBS:バードリサーチニュース2004年11月号参照)の2004年の結果がBTOニュース2005年9/10月号に掲載されていました。

Raven, M. & Noble, D. 2005. Recent changes in common bird populations. BTO News 260: 12-15.

2004年の調査では、夏鳥(長期的に見ると減少している種を含む)が増加していたことが特徴的でした。ショウドウツバメ、カッコウ、ノジロムシクイ、キタヤナギムシクイなどの鳥たちは、アフリカで越冬するのですが、2003/2004年の冬に越冬地の降水量が多かったことが良好な越冬状態をもたらし、それが個体数の増加につながったとみられています。日本の夏鳥の状況をみてみると、冬鳥には大きな年変動が見られる反面、夏鳥の生息数は安定しているように感じられます。日本の夏鳥の越冬地は東南アジアなどであり、森林伐採で環境は悪化しているものの、アフリカのような乾燥地帯と比べると、越冬地の環境の年変動は小さいのかもしれませんが。

もう1つ興味を引いたのは、ハイタカが減っていたことです。イギリスのハイタカは、1950年代にDDTの影響で卵の殻が薄くなって繁殖成績が低下し、ディルドリン(HEOD)によって成鳥そのものが死亡したことで個体数が激減しました。1970年代後半からこれらの使用を禁止したことで個体数が回復していることをNewton(1998)で読んだことがあったので、イギリスでは今もハイタカが増えているものと思込んでいました。今回の記事によると1990年代半ばがピークでその後は減少に転じ、1994年に比べると21%も減少しているそうです。この減少がはじまった時期は、関東地方でツミが減少してきた時期(植田 2005)とほぼ一致しています。ツミの減少についてはカラス類の増加が大きいのですが、イギリスのハイタカがなぜ減少に転じたのかは、残念ながら書かれていませんでした。【植田睦之】

引用文献

Newton, I. 1998. Population Limitation in Birds. Academic Press.
植田睦之. 2005. 住宅地で繁殖するツミ ~都市近郊での分布の変化. Birder 2005年6月号

論文紹介

枚数が多くて成鳥になると伸びる オオジシギのオスの尾羽

日本野鳥の会自然保護室 浦達也

バードリサーチ会員の浦達也です。この度、拙著論文が Emu –Austral Ornithology– に掲載されましたので紹介させていただきます。オオジシギの外部形態の雌雄差を詳しく調べたところ、2つ大きな発見があったという話です。

Ura, T. & Azuma, N. 2005. Sexual dimorphism of Latham's snipe (*Gallinago hardwickii*). Emu 105: 259-262.

オオジシギは主に北海道、南サハリン、アムール川河口域で繁殖し、オーストラリア東部、タスマニア島で越冬します。繁殖期には、雄は尾羽を広げながら、ディスプレイフライトと呼ばれる独特な誇示飛行行動を行います(写真1)。

ジシギ類は外見をぱっと見ただけでは雌雄がわかりませんが、一般的に雌は雄よりも体と嘴が大きく、逆に雄は雌よりも尾羽と外側尾羽が長いといわれていて、オオジシギでもオーストラリアでの調査から同じ傾向があるとされています(Higgins & Davies 1996)。しかし、越冬地であるオーストラリアでは齢査定ができません。また、尾羽の枚数の個体差については、まだ調べられていません。そこで、私達は北海道苫小牧でオオジシギの成鳥64羽、幼鳥457羽を捕獲して体重や体サイズを計測し、尾羽の枚数を数え、採血してDNAによる性判定を行ないました。



図1. ディスプレイフライトをするオオジシギ。

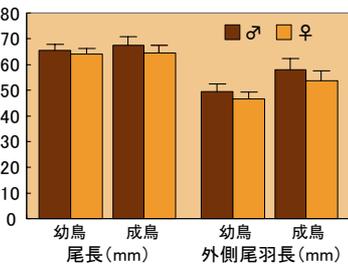


図1. 尾長と外側尾羽長の比較。

その結果、成鳥と幼鳥のそれぞれでいくつかの計測値に雌雄差が見られました。露出嘴峰長とふ蹠長は幼鳥、成鳥ともに雌のほうが大きく、この傾向には年齢は関係ないことがわかりました。しかし、尾羽長と外側尾羽

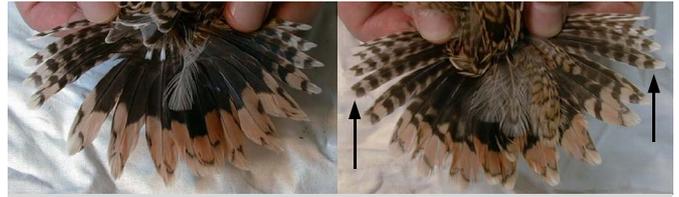


写真. 北海道大学付属植物園所蔵のオオジシギの標本の尾羽。左が16枚、右が18枚。↑は16枚の個体には存在しない羽を示す。

長は、幼鳥では雌雄差が見られないのですが、成鳥ではオスのほうが長いということがわかりました(図1)。また、尾羽の枚数は、14、16、18枚のものがいました(写真)。DNAによる性判定をしたところ、18枚の個体のほとんど(82.7%)が雄、逆に16枚の個体のほとんど(74.8%)が雌で、14枚の個体ではすべてが雌だということがわかりました(図2)。

尾羽の枚数がオスのほうが多く、その長さが成鳥になるとメスよりも長くなるという結果が得られたことは、それだけ、尾羽が雄のディスプレイフライトにとって重要なのだということを示していると言えます。尾羽の枚数が多く長くなると、空気抵抗が増え、音が大きくなったり、空中での操作性が向上するなど、ディスプレイフライトにプラスに働き、雌をより強く惹きつけられることが考えられます。しかし、そのことを明らかにするためには、音の大きさや、曲芸の複雑さ、モテ具合との関係性を調べる必要があります。

さらに、オオジシギ以外のジシギ類でも同じ調査をして、進化系統なども含めて研究していくことで、ジシギ類の性的二型の進化について面白いことが分かるかもしれません。

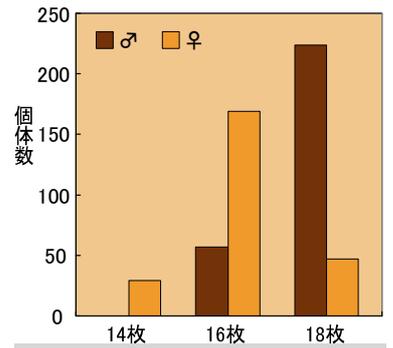


図2. 尾羽の枚数と雌雄の関係。

引用文献

Higgins, P. J., and Davies, S. J. J. F. 1996. 'Handbook of Australian, New Zealand & Antarctic birds, 3'. Oxford University Press. Melbourne.

活動報告

生態図鑑をWebにまとめて掲載しました!

高木憲太郎

今までに12種の鳥を生態図鑑に掲載してきました。そろそろ、どれがどの号に載っていたのかわかり難くなってきているのではないのでしょうか?そこで、ニュースレターの生態図鑑の部分をもとめて見られるようにホームページに掲載しました(協力会員の方は、PDFファイルはご覧になれません)。

http://bird-research.jp/1_newsletter/zukan.html

日本鳥類目録第6版(日本鳥学会2000)に準じた分類で並べてありますので、是非ご利用ください。

※ファイルを見るときは、ニュースレターを見るときと同じユーザー名とパスワードを入力してください。



ヒヨドリ 英: Brown-eared Bulbul 学: *Hypsypetes amaurotis*

1. 分類と形態

分類: スズメ目ヒヨドリ科
 全長: 275mm (249-290mm)
 自然翼長: 125.9±5.7mm (113.5-137.6, N=110)
 尾長: 115.1±6.4mm (103.0-129.5, N=106)
 全嘴峰長: 30.8±1.3mm (27.2-32.9, N=60)
 ふ蹠長: 22.9±1.3mm (19.1-31.3, N=105)
 体重: 79.9±12.1mm (54.0-110.0, N=111)
 ※全長は榎本(1941)による。それ以外は、著者らによるつくば市での計測(平均±SD)だが、繁殖個体と越冬個体が混じっている。また、雄よりも雌のほうがやや小型であるが、個体変異や地域変異が大きく明確に区別できない。

羽色: 雌雄同色で頭から背は灰色、羽と尾は灰褐色、赤褐色の耳羽が目立つ。胸から腹にかけて灰褐色の縦斑がある。北の個体ほど羽色が淡色に、南の個体ほど褐色が濃くなる傾向がある。特に亜種ヒヨドリと亜種ハシブトヒヨドリの胸は灰色なのに対し、それ以外の亜種では暗褐色であり区別が可能である(齊藤 2002)。



2. 分布と生息環境

分布: 国外ではサハリン、朝鮮半島南部、台湾、フィリピン北部に分布する。日本には8亜種が分布し、北海道・本州・四国・九州・対馬・大隅諸島・伊豆諸島、屋久島、種子島などに亜種ヒヨドリ、小笠原諸島に亜種オガサワラヒヨドリ、火山列島に亜種ハシブトヒヨドリ、大東諸島に亜種ダイトウヒヨドリ、奄美諸島にアマミヒヨドリ、沖縄諸島・宮古諸島に亜種リュウキュウヒヨドリ、与那国島以外の八重山諸島に亜種イシガキヒヨドリ、与那国島に亜種タイワンヒヨドリが分布する。ただしこれらの亜種に関しては、再検討が強く望まれている(日本鳥学会 2000)。



生息環境: 平野からかなり標高の高い山地まで生息し、林だけでなく農耕地や市街地など木のある様々な環境に生息する。かつては市街地では冬鳥であったが、東京では1968年頃から春になっても市街地に留まるようになり、1980年代には東京の都心部全域で繁殖するようになった(唐沢 1997)。

3. 生活史

繁殖システム: 繁殖期は5-9月と長く、一夫一妻で繁殖し、同一ペアが1繁殖期に3回繁殖した記録もあるが、捕食などによる繁殖失敗のための繰り返し繁殖が多く、繁殖が成功するのは7月以降であることが多い(図1)。

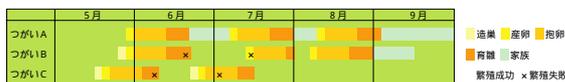


図1. ヒヨドリの繁殖パターン。つがいAは極めて稀な例。つがいB, Cが最も多いパターン。(掃部1995, 田中2000より作図)

巣: 巣は腕型、葉のよく繁った樹木の枝分かれしたところに乗せるように、地上1-5mの高さにつくる。巣材は外装に小枝やツタ、内装に草の細い茎や細根を使う。市街地の巣ではほぼ全てビニール紐が外装に使われている。内径6-10cm、深さ3-6cmでヒヨドリの体サイズの割には小さな巣である。

卵: 一腹卵数はほぼ4卵(羽田・小林 1967, 掃部 1995)。卵は淡い紫褐色地に褐色の斑点がある。長径約3cm、短径約2cm。



写真3. ヒヨドリの卵。

抱卵期間・育雛期間・巣立ち率:

抱卵期間は12-14日で主に雌のみが行い、育雛は雌雄で行う。ヒナは羽が生えそろう前の孵化後約10日で巣立つが、上手に飛べないので数日は巣の近くに居る。その後も1-2ヶ月は親の世話を受ける(羽田・小林 1967, 掃部 1995)。つくば市での10つがいの観察では1つがいあたり年に平均2.3回繁殖を試み、全体では23回中11回成功し、10つがい中8つがい雛を巣立たせた。繁殖失敗の原因はほとんどが捕食によるものであった(掃部 1995, 田中 2000)。

渡り: 島に棲む亜種は留鳥だが、亜種ヒヨドリは渡りを行い、年によっては冬期に奄美大島や沖縄本島まで移動する。いくつかの場所で100羽から時には数百羽を越すような群れになって海を渡っていくところが観察されているほか、日本全国で数羽から数十羽程度の群れで渡って行く姿が観察されている。

4. 食性

ヒヨドリの食性は多岐に渡り、果実、花蜜、花卉、葉、新芽といった植物食のものから、爬虫類、昆虫、クモ、カタツムリといった動物食、さらに人の与えるパンも食べる。茨城県つくば市でヒヨドリが採食していた植物は木本では32科74種、草本では7科8種、農作物では6科12種におよぶ(山口 2004)。主に液果(ベリー)を好むが乾果も採食し、ありとあらゆる種類の木の実を食べていると言ってよい。また冬期にはコマツナやキャベツなどの葉菜類も食害する。春から夏にかけては昆虫類が多く出てくるため、動物食を食べる割合が増え、セミなどを追いかけて回す姿をよくみかける。ヒナには動物食を多く与える。



写真4. 寒緋桜で吸蜜するヒヨドリ。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

●留鳥? 漂鳥? 冬鳥?

ヒヨドリはよく鳴き目立つ鳥であるため、センサスによる個体数推定がしやすい種である。つくば市でのラインセンサスによるヒヨドリ個体数の1年間の個体数変動を図2に示す。

秋と春の渡りの時期には上空を通過していくヒヨドリが観察されるが、それを別にする、春から夏にかけては約20羽程度が安定して生息していると考えられる。夏に個体数が減少するが、これは換羽の時期なので林の中などで静かに

生態図鑑

しているためだと考えられる。その後徐々に個体数が増加していき、年明け頃に最大となる。これら増加した個体は北から来た移入個体と考えられ、基本的に春まで調査地にとどまる。秋の大きなピークは木の実を集団で採食しているところを観察したものである。木の実の消失とともに個体数は減少するが、これは周辺地域からヒヨドリがいなくなったのではなく、調査範囲外の畑などで採食することが多くなったためである。2月から3月にかけてのピークはコマツナ畑で採食していた集団であり、ときには100羽を超えることもある。4月にはサクラ並木で多くの個体が採食し、その後、調査地からヒヨドリが減少し留鳥個体のみとなる。



図2. 茨城県つくば市におけるヒヨドリの1年間の個体数変動。上段が通過個体、下段が定着個体を示す。(山口2005より)

つくば市で個体識別をして追跡した結果からも、1年中調査地に生息する個体と冬の期間のみ生息する個体の両方が確認された。つまり、つくば市では留鳥、通過、冬鳥の3タイプのヒヨドリが存在することになる。また、木の実の消失とともに長距離移動することも分かっており、大阪で12月に捕獲標識された個体が翌年の1月に100km離れた和歌山県で回収されている。(和田2002)。このことからヒヨドリは漂鳥であるともいえる。

●ヒヨドリの渡り

山階(1934)によると北海道の個体のみ渡りをし、そのほかの地域では留鳥または漂鳥であるとされている。しかし、今日では、どうも状況が違うようである。

そこで、2004年の秋、全国にヒヨドリの渡りの観察情報の提供を呼びかけた。その結果、北海道から九州まで全国80ヶ所から情報が集まり、総観察群数は1,976群、総観察羽数は88,294羽におよんだ。例数の少なかった中国地方と九州地方を除き、8つの地域でヒヨドリの渡りが観察された。

ヒヨドリの秋の渡りは北から南への移動であることが分かっていたので、北海道などの北から南へ順に渡りが観察されると予想していた。ところが、実際は、関西などの南の地域で早くから渡りが始まり、北の地域に行くほど渡りの始まりが遅くなるという予想外の傾向が得られた(図3)。関西地域では9月9日に最初の渡りが観察され、11月8日まで3ヶ月間という長期にわたって観察された。一方、北海道では、10月10日に最初に観察され、11月2日が最後であった。

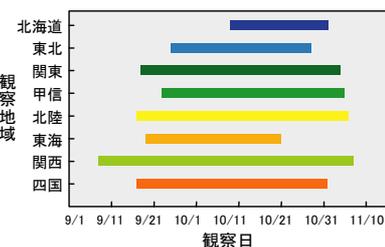


図3. 2004年秋の地域別のヒヨドリ渡り観察期間。(山口2005より)

南の地域で渡りが早く始まるということは、北から渡ってくる群が到達する前に、その地域の群が渡り始めることを示唆している。これは高標高地から低標高地への移動かもしれない。

2005年秋にも同様に情報を集めているが、現在のところ2004年に比べヒヨドリの渡りの開始が遅いようである。2005年秋は全国的に木の実が豊作であるという情報もあり、木の実との関係も興味深い。



写真5. 群れて渡るヒヨドリ。

●人間との関係

ヒヨドリは農作物に被害を与える主要な害鳥とされており、農林水産省の資料によると、2003年度の被害面積は4,400ha(鳥類の中では6位)、被害量は5,300t(同、2位)、被害金額は89,400万円(同、3位)であり、日本各地、特に果樹栽培地などで深刻な問題となっている。環境省によると、2000年度には有害鳥獣駆除で約34,000羽、狩猟で343,000羽ものヒヨドリが捕獲されている。

しかし、ヒヨドリは夏季に昆虫(害虫)を多く食べ、農業に貢献している面もある。被害の面のみを強調していると、大きな誤りを犯す可能性がある。日本にヒヨドリが何羽生息するのかさえ分からない現状ではあるが、生息地管理を含む個体数管理手法をとり入れ、人間とヒヨドリの共存を図らなくてはいけない時期が来ているのではないだろうか。

6. 引用・参考文献

榎本佳樹. 1941. 野鳥便覧(下). 日本野鳥の会大阪支部. 大阪.
 掃部康宏. 1995. ヒヨドリ *Hyppipetes amaurotis* の行動圏の解明. 卒業論文. 筑波大学.
 唐沢孝一. 1997. ヒヨドリ. 日本動物大百科4鳥類II. p. 83. 平凡社. 東京.
 斉藤安行. 2002. ヒヨドリの亜種は本当に区別できるのか? 野鳥 649: 15-17.
 田中智子. 2000. 成熟果実の分布に伴うヒヨドリ (*Hyppipetes amaurotis*) のテリトリーと行動圏の変化. 修士論文. 筑波大学.
 日本鳥学会. 2000. 日本産鳥類目録改訂第6版.
 羽田健三・小林建夫. 1967. ヒヨドリの生活史に関する研究. 山階鳥研報 27: 61-71.
 山口恭弘. 2004. ヒヨドリの全国移動と農作物被害. 農業技術 59: 173-178.
 山口恭弘. 2005. 渡りと木の実の豊凶から考えるヒヨドリの鳥害対策. 農林水産技術研究ジャーナル 28: 35-39.
 和田岳. 2002. 冬のヒヨドリの食べ物とくらし. 野鳥 649: 6-9.

執筆者

山口恭弘 中央農業総合研究センター 耕地環境部 鳥獣害研究室



ここはどこ?

ヒヨドリに関わり始めて6年になりました。調べれば調べるほど新たな発見と新たな謎が出てきます。謎のほうが多い...という話も。

もしかして「立ち入り禁止」の場所に入り込んでしまったのでしょうか...

研究誌 Bird Research よい

2本の論文が新しく掲載されましたので、紹介します。

ハシブトガラスは桜とともに散る？

1本目は松田道生さんの「六義園におけるハシブトガラスの死体の数・2002年」です。松田さんは六義園という都内の公園で長年にわたって鳥類調査を続けているのですが、2002年にハシブトガラスの死体が拾われる時期について調査し、その結果をまとめました。この調査から、3月中旬から4月中旬のおよそ1か月のあいだに、1年間にみつかるとハシブトガラスの死体の60%がみつかることがわかりました。ちょうどこの時期は、木の実もなくなり、昆虫もまだ発生していない時期です。さらに繁殖個体がなわばりを構えて、排他的に振舞います。

松田さんは、食べ物が少なく、採食場所も制限された若鳥がこの時期にたくさん死亡するのではないかと考えています。なかなか鳥が死ぬ時期というのは知ることができないので、とても貴重なデータだと思います。



ハシブトガラス

都市化がハクセキレイに味方する？

もう1本は平野敏明さんの「宇都宮市におけるセキレイ類3種の生息分布と生息環境の変化」です。平野さんが1984-1985年に調査を行っていた宇都宮市で同じ方法で再度セキレイ類3種(セグロセキレイ、ハクセキレイ、キセキレイ)の分布を調べたところ、セグロセキレイの分布は変わらず、ハクセキレイが増加し、キセキレイは減少していたそうです。ハクセキレイは利用する環境も変化しており、以前はほとんど分布していなかった農耕地や大河川にも分布するようになっていたということです。

平野さんはこのような分布変化の要因の1つとして都市化をあげています。農耕地や河川にも高架道路や建物ができ、営巣場所が増え、セグロセキレイとの営巣場所をめぐる競争が小さくなったことをあげています。同じ場所で暮らすようになった、セグロセキレイとハクセキレイの行動は、以前と比べて変化しているのか？キセキレイが減った原因は何なのか？(ハクセキレイの増加と関係はあるのだろうか?)など、今後の研究の発展も楽しみです。【植田睦之】

図書紹介

東三河の野鳥

皿井信著／豊川堂 定価 2000円(税込)

本書では、著者のフィールドである東三河地域(愛知県東部)で出会った野鳥を、写真とともに紹介しているフォトエッセイです。1ページに1種、全部で180種の野鳥が紹介されており、写真のほとんどは著者自身が自然の中で撮影したものです。納得のいく出来栄のものだけを厳選したというだけあって、どれも素晴らしい写真ばかりです。



見つけ難い鳥、ちょこまかと動く鳥、声はすれども姿を現さない鳥など、なかなか撮影できない鳥も見事に捉えていて、著者の並々ならぬ努力と野鳥への情熱が感じられます。個人的には、口を開けたオオタカの写真が印象的でした。

野鳥図鑑としての構成を残しつつも、生態だけではなく、和名の由来、著者の観察記録、出会いのエピソードなどが盛り込まれていて、思わず笑ってしまったり、うなずいて共感したりと、普通の図鑑とはひと味違う感覚で楽しむことができます。イカルチドリは「怒る千鳥」ではなく、「鶺鴒千鳥」である。別の、イカルという山野の鳥に似ているチドリということだろうか。」と紹介されています。ところが著者が見つけた鶺鴒千鳥は、キャンプにやってきた人間に営巣を邪魔され、怒る千鳥となってどこかへ飛んで行ってしまったそうです。ユーモアの中にも、自然に親しむ行為が逆に自然を脅かしているという問題が提起されており、考えさせられるものがありました。また、著者独特の視点から書かれた文章は、簡潔で頭に入りやすく、野鳥の名前とその特徴を覚えるのに適していると思いました。巻末には、「出会いの野獣」というコーナーもありますので、そちらもぜひご覧下さい。

本書は、バードリサーチの会員でもある著者の皿井さんから寄贈していただきました。どうもありがとうございます。【野村浩子】

バードリサーチニュース 2005年11月号 Vol.2 No.11

2005年 11月 15日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 I-102

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: info@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎